

# 鎌ヶ谷市 郷土資料館 だより 第54号

## 目次

- 第23回ミニ展示「小金牧ものがたり」を開催……………1～2
- 「歴史講演会」開催案内……………2～3
- 郷土資料館この一品⑬……………3
- 史料整理の現場から③……………4

第23回ミニ展示を開催

## 小金牧ものがたり

### ～野馬と牧士と野付村～

郷土資料館では、3月13日（土）から5月9日（日）までの会期で「第23回ミニ展示」を開催します。このミニ展示は、本来昨年度の開催を予定していましたが、新型コロナウイルスに伴う緊急事態宣言により延期したため1年遅れの開催となります。

今回のミニ展示は「小金牧ものがたり ～野馬と牧士と野付村～」がテーマです。江戸時代、下総台地には幕府直轄の馬の牧場が広がっていました。このうち市域を含む千葉県のの北西部に小金牧がありました。

牧に放たれていた馬は「野馬」、そして牧周辺の村々は「野付村」と呼ばれ牧と深い関わりがありました。また、牧を管理する現地の責任者は「牧士」と呼ばれる人たちでした。

今回の展示では、野馬と牧士と野付村の村人たちの関わりを、古文書や絵図を中心として近年新しく発見された資料なども含め、現物資料や写真パネルなどで小金牧への理解を深めていただきます。

### 展示内容

#### ◇小金牧ってなあに？

国史跡 PR キャラクターの「とっこめくん・のまっきー」と一緒に小金牧について学びます。



最後の牧士 清田源内夫婦（個人蔵）

#### ◇牧を支えた人々

①牧士：小金牧の運営を現場で監督した責任者のことを牧士といい、市域では三橋家（中沢）と清田家（鎌ヶ谷）が代々この役職に就任していました。ここでは、新たに発見された史料も含めて牧士について紹介します。

（2ページへ続く）

(1ページからの続き)

②村の人々：牧周辺の村の人々は、毎日、牧の見回りや草木の管理などが義務として課せられていました。ここでは、村の人々とそこから見えてくる野馬と牧の様子について紹介します。

**展示期間** 3月13日(土)～5月9日(日)

ただし、毎週月曜日と3月20日(土)、4月29日(木)、5月4日(火)・5日(水)・6日(木)は休館

**開館時間** 午前9時～午後5時

**会場** 郷土資料館2階展示室

## 新型コロナウイルスへの対応

新型コロナウイルス感染防止のため、来館時にはマスクの着用と受付での入館者票への記入をお願いします。また、来館者が多い場合は入場制限を行う場合もあります。最新の情報は市ホームページ、または郷土資料館☎445-1030へお問い合わせください。

なお、今回の展示ではギャラリートークは実施しません。あらかじめご了承ください。

### 第23回ミニ展示関連企画

## 歴史講演会(I)・(II)を開催

郷土資料館では、3月13日(土)から始まるミニ展示の関連企画として、「牧」をテーマとした歴史講演会(I)及び(II)を開催します。鎌ヶ谷の歴史を語るうえで欠かせない牧の歴史を知る絶好の機会。ぜひご参加ください。

### ◇ 歴史講演会(I)

江戸時代、軍事や輸送上の重要な役割を果たす馬を生産するために、幕府はみねおか小金牧・佐倉牧・あしたか嶺岡牧(現・千葉県)と愛鷹牧(現・静岡県)を設置しました。幕府はこれらの牧をどの様に運営していたのでしょうか。

歴史講演会(I)では「江戸幕府の馬政と小金牧」と題して、江戸時代の馬政についてお話しいたします。

**日時** 3月14日(日)午後2時～4時



小金原川柳絵

**講師** 吉岡 孝さん(國學院大學文学部教授)

### ◇ 歴史講演会(II)

江戸時代、現在の初富などの市域中央部は幕府直轄の小金中野牧の一部でした。牧には半野生馬の「野馬」が放牧されており、管理は牧士と呼ばれる地域の有力者に任されていました。

歴史講演会(II)では「ゆくうま くるうま～上ケ馬・父馬・払い馬～」と題して、牧に放牧されていた「野馬」について最新の研究成果を基にお話しいたします。

**日時** 3月28日(日)午後2時～4時

**講師** 高見澤美紀さん(鎌ヶ谷市文化財審議会委員・國學院大學兼任講師)

### — (I)・(II)共通事項—

**対象** 市内在住・在勤・在学の方

**場所** 生涯学習推進センター(まなびいプラザ)3階研修室1

**定員** 各回25名(応募者多数の場合は抽選)

**申し込み** 3月2日(火)受付開始～6日(土)

までに郷土資料館☎445-1030、FAX: 443-4502へ。なお、抽選結果は3月9日(火)までに連絡します



## その他

◎新型コロナウイルスの蔓延状況によっては開催を中止する場合があります。

◎当日はマスクを着用し、受付で検温・手指消毒を行ってください。また、次の方は受付済みであっても入場をお断りさせていただきます。ご了承ください。

① 37.5℃以上の熱がある方。また、咳やだるさ、息苦しさなどの症状がある方。

② 一緒に暮らしている人に発熱や風邪の諸症状が認められる方。

③ 過去2週間以内に海外のコロナウイルス流行地へ赴いた方。

④ 過去2週間以内に、新型コロナウイルス感染者と濃厚接触の可能性があった方。



郷土資料館の入口ドアを、新型コロナウイルス対策の一環として非接触型の自動ドアへ改修しました。

### 郷土資料館この一品⑬

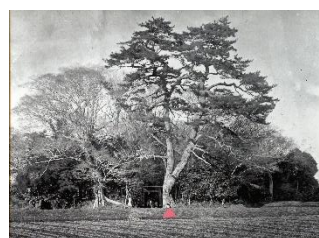
#### 中沢八幡・春日神社のクロマツの輪切り

現在、郷土資料館では新型コロナウイルス感染症対策のため、常設展示室に臨時の受付を設けて入館者カードのご記入をお願いしていますが、その受付横に大きな木の輪切りがあるのをご存じでしょうか。これが今回ご紹介する中沢八幡・春日神社の参道入口に生えていたクロマツの輪切りです。

この木は、参道入口に面した道路の拡幅によって、昭和46年（1971）頃に枯れてしまったものを、地上2メートルほどの高さの部分で輪切りにしたものです。直径は1メートル31センチ、周囲は4メートル11センチあります。

樹齢は、中心から年輪を数えると、約300年のものであることがわかりました。枯死した昭和46年から300年前、すなわち江戸時代前期の1670年頃に芽生えたものと推定されます。

このクロマツが生きていたら、千葉県北西部でも有数のものとなっていたでしょう。この切り株は今も銅板で被われて残されている姿を見ることができますが、枯死しているため風雨の影響もあり年々少しずつ腐食が進ん



中沢八幡・春日神社の森とクロマツ（1899年撮影）



クロマツの輪切り

でしまっているように見えます。今、中沢八幡・春日神社の前の道は、鎌ヶ谷と市川方面を往来する車や、野球シーズンにはファイターズ鎌ヶ谷スタジアムへ向かうファンが行き来していますが、このクロマツが生きてきた歴史の中では、どのように風景が変わり、どんな人々が往来したのか、想像すると興味が尽きません。

この輪切りは長く神社の社殿に保存されていましたが、神社の関係者の方々のご厚意により郷土資料館で保存、展示させていただいています。

考古遺物や歴史資料、民具が数多く展示されている当館の中でも、唯一の自然関係資料となります。年輪の幅はその年の気候を反映しており、温暖な年は幅が広いそうです。このクロマツの年輪はどうでしょうか？一度足を止めてじっくり観察してみたいはいかがでしょうか。

## 【史料整理の現場から③】

### 芳野金陵の書・続

前々号（52号）でご紹介した芳野金陵の書について、近年、東金市菱沼の旧家・土屋家にもほぼ同じものが残されていることが分かりました。近世～明治期に村役人や戸長などを務め、また代々書画を愛好した土屋家には、幕末以来多くの文人・画人の作品が伝来しています。同じ金陵の書が残された経緯には、共通する何かがあるのかもしれませんが。

本号では、同家文書調査報告書に掲載されている書の画像を参考に、前回あまりふれることができなかった漢詩本文を中心に、その後の調査の結果を報告したいと思います。

まず、判読の誤りなどを訂正のうえ、改めて翻刻を掲げると、次のようになります。

鑾輅響鱗々<sup>(鑾脱カ)</sup> 街衢絶点塵衣冠鶴  
列旛旆鳳凰振水尽朝東海星皆  
拱北辰蓬艾無不照更仰日光新  
<sup>(明治元年)</sup>  
戊辰十月拝観  
東幸盛儀欣然恭賦 七十五翁育録旧製

当市の旧家に伝存するものは、詩が39字で書かれていました。しかし、おそらく1字書き落としがあり、もとは40字からなる五言律詩であったと思われます。律詩とは8つの句で構成される漢詩のことで、1句が5語から成る五言律詩と、1句が7語から成る七言律詩とがあり、いずれも2句1組で4つの聯<sup>れん</sup>を形成しています。

その形を分かりやすくするため、各句に番号を付して詩文を配列してみます（なお、正確な書き下し・翻訳は難しく、各句の語句について

おおよその意味を補足するにとどめました）。

- |         |         |
|---------|---------|
| 1 鑾輅響鱗々 | 2 街衢絶点塵 |
| 3 衣冠鶴鷺列 | 4 旛旆鳳凰振 |
| 5 水尽朝東海 | 6 星皆拱北辰 |
| 7 蓬艾無不照 | 8 更仰日光新 |

- 1 鑾輅(らんろ)・天子(天皇)の車。鑾は鈴、輅は車の意。鱗々(りんりん)・鱗のようにあざやかで美しいさま
- 2 街衢(がいく)・ちまた、まち。点塵(てんじん)を絶(た)つ・一点の塵も無いさま
- 4 旛・旆・いずれも旗の意
- 5 水尽(すいじん)・水平線のかなた
- 6 拱(こまぬ)く・もと両手の指を胸の前で組み敬礼する意。北辰(ほくしん)・北極星
- 7 蓬艾(ほうがい)・よもぎ。但し蓬は乱れているさま、艾は治まる意をもつ。

こうしてみると、漢詩を作る際のいくつかのきまりごとの一つである押韻<sup>おうえん</sup>（同一または類似の音韻をもつ語を一定の箇所<sup>おうえん</sup>に用いること）についても、偶数句の末尾「塵」「振」「辰」「新」で、シン（漢字表記では真）の韻を踏んでいることがはっきりと分かります。

また、風格ある書体もさることながら、一つ一つの文言からは、明治維新に際し天皇が江戸城に入る華やかな東京行幸（東幸）の行列が、金陵の目をとおしておごそかに美しく、大きなよろこびをもって描かれている情景を、感じることができるのではないのでしょうか。

この詩が詠まれた時から150年余が経ち、当時とくらべて漢詩に親しむことは格段に少なくなった感がありますが、こうした史料の発見を機に、新たに理解を深めていくことができればと思います。

鎌ヶ谷市郷土資料館だより 第54号 令和2年2月15日発行 編集・発行：鎌ヶ谷市郷土資料館

住所：〒273-0124 鎌ヶ谷市中央1-8-31 Tel：047-445-1030 Fax：047-443-4502

メール：[kyodo@city.kamagaya.chiba.jp](mailto:kyodo@city.kamagaya.chiba.jp)

ウェブサイト：[http://www2.city.kamagaya.chiba.jp/sisetsu/kyoudo\\_2/index.html](http://www2.city.kamagaya.chiba.jp/sisetsu/kyoudo_2/index.html)